

# みみタロウ

日本語版 67号 2007年12月

滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」  
おまつし はま びあざおうみ  
大津市におの浜 1-1-20 ピアザ淡海 2F  
TEL:077-523-5646 Fax:077-510-0601  
E-mail:mimitaro@s-i-a.or.jp  
URL :http://www.s-i-a.or.jp

## 私 は どん な マ マ ？ ？

王 貴 勤



わたし は一人娘がいて、今年21歳。今、ハワイ大学に留学中。娘を産んでママになってからの21年間のことを振り返ると、思うことがいっぱいある。私の体験談が、今、育児

真最中のママ達に少しでも役に立てば、嬉しく思う。

娘が7歳の時、私と娘は、夫の後を追って来日した。娘は外国人児童を初めて受け入れる小学校に入った。子どもにとって、学校は、誰とも交流できず、理解のできない未知の世界だった。新しい環境に馴染むため、娘は努力した。しかし娘にとって、中国の学校から日本の学校へ転校することは、春からいきなり冬に入ったみたいな急激な変化だった。大好きなパパと別れたくない一心で、娘は学校での不愉快なことを我慢し、夜、悪い夢にうなされたりした。友達が欲しかったのにうまく行かず、以前の様な楽しい生活はなくなってしまった。

小学校6年の冬休み、私は娘を連れて帰国した。娘は私の友達に言った。「ママに言って、私はもう日本に行かない、日本は大嫌い」。この話を聞いて私はびっくりした。日本の学校で一体何があったのか私は全く知らなかったのだ。私は娘の事が心配でならなかったのに、学校での様子はわからなかった。それなら家庭での時間を楽しく過せるようにしようと思ったが、私にとっても日本での生活は厳しかった。私自身、来日後、祖国でのように仕事はできず、言葉も通じず、生活は困窮し、住宅環境にもなかなかなじめなかった。すっかり変わってしまった生活に、娘は元気がなくなつた。私たち大人も生きるのに精いっぱい、子どもの気持ちを思いやる余裕も無かった。

日本での滞在期間が長くなるにつれ、娘は親の服装などを日本風にするよう注文をつけ始めた。私は、苦勞をして周りに合わせなくていいよと言ったが、娘の行動はコンプレックスを克服するためだと分かった。娘は日本に溶け込もうと努力し続けたが、それでも一番聞きたくないのは「日本の女の子みたいになつたわね」という褒め言葉だった。中学校に進学すると、娘に「日本式のお

弁当を作ってね」と言われた。娘の気持ちを思い、毎朝日本風と夫のための中国風の弁当を作った。娘は中学で練習が厳しい吹奏学部に入ったが、自分で塾を選び、行きたい高校に入った。だが高校生になってからも日本から出たいという気持ちは変わらなかった。そして留学に備え、空手部で三年間、精神と体を鍛えた。高校を卒業し、いよいよアメリカへ留学することになった。しかし物を整理しながら、「小学校のものは全部処理してね」という言葉に、私の胸は痛んだ。娘は感謝のメッセージを書いた葉書を私たちに手渡し出発した。そして今、いろいろな問題を自分で解決し、親の気持ちも理解できるまでに成長した。母の日、父の日、ママ、パパの誕生日にはプレゼントやカードを送ってくれる。そして、私は、娘にとってももう鬼ママではない。

これまでを振り返ると、私はあまりいい母親ではなかったと思う。娘とうまく意思疎通ができず、娘の気持ちが分からなかった時も多かった。もうやり直すこともできないので、自分の体験から若いママ達に伝えたい。いいママになるのは決して簡単でなく、子育ては巨大なプロジェクトだと言うことを。特に異文化の中での子育ては複雑だ。子どもの成績だけに関心をもたず、気持ちを良く理解することが大切だ。大人には身勝手なところがあり、自分が日本料理が嫌いと、毎日中国料理を作り、毎日自分の好きな中国チャンネルを見てしまう。子供は異文化社会の中でその影響を受けながら成長するので当然、親と違う面があり、そのことも理解しなければならぬ。印象に残っているのは、初めて我が家で日本風のお正月をした時、娘が「今年のお正月はお正月らしい」ととても喜んでくれたこと。娘の言葉を聞き、喜びの様子を見ながら、私は複雑な気分だった。

私達大人は異文化社会で子どもを育て、子どもはその中で教育を受けている。子ども達が異なる価値観や習慣の中で成長するなら、大人もまた、その違いを吸収しながら成長しなくてはならない。大人のせいでも子どもが新しい社会を経験できなければ、子どもは社会で大きな圧力に耐えなければならなくなるから。私達親も子どもが異文化社会でもすくすく成長できるよう、沢山努力しなければと思う。